

レイチェル・カーソンと環境保護運動

上岡克己

序

拙論「レイチェル・カーソンと自然保護運動」（『国際社会文化研究』第11巻、2010）では、カーソンの自然との出会いに始まり、彼女の自然保護意識の誕生と発展にいたるまでを彼女の初期の著作を中心に考察した。本稿では、カーソンが自然保護から環境保護へと視野を広げ、自然や環境に対する認識を成熟させてゆく過程を、主に彼女の中期・後期の著作から考察する。

1. 中期の作品と自然保護団体

「デイ氏の解任」

1953年4月、かつての上司で、カーソンの『自然保護の現状』シリーズを積極的に支援したアルバート・デイ魚類野生生物局局長が、政権交代のあおりをくう形で解任された。解任させたのは、アイゼンハワー大統領の共和党政権下で内務長官に任命されたマッケイであった。彼は自然保護団体の間では悪名高い内務長官で、国立公園や国立野生生物保護区内の資源を民間に開放する企業寄りの政策をとっていた。後任には当然のことながら、専門領域とは無縁の産業界寄りの実業家が就任した。

自らが関わった国立野生生物保護区に危機感を覚えたカーソンは、自然保護派のデイ局長解任に対して初めて公の抗議の声をあげた。1953年4月22日付けの『ワシントン・ポスト』紙に掲載された「デイ氏の解任」記事は、政府による自然保護へのあからさまな介入を激しく非難するものであった——「彼[デイ]は有能で公正な管理者であるとの評価を得たばかりか、公共資源の略奪を狙って野生生物保護条例の緩和を要求した少数グループに対しては、断固たる態度で対応する気概を示した……内務省のこうした動きは、海底油田の採掘や、国立公園や国有林など公有地への侵入に関して、譲歩する法案が提出されたことをあわせて考えれば辻褄があう。長年にわたって、全米の公共心に富んだ人々は、それが国家の存亡にかかわる重要な問題であることを認識しつつ、天然資源の保護のために働いてきた。彼らが苦勞の末に得た成果は、政治志向の強い役人の手で、際限のない搾取と暗黒時代へ逆戻りさせられれば、たちまち消されてしまう」（『失われた森』145）。

国立公園システム

「デイ氏解任」の中で、カーソンがマッケイ長官率いる内務省が国立公園を侵略していると言及したのは、当時国立公園をめぐる問題が大きな社会問題として浮上していたからにはほかならない。それはユタ州にあるダイナソア国立記念物公園内にダムを建設するという計画に対して、自然保護派がダム阻止のために激しく抵抗し、一方開発派の方も一歩も後に引かなかったことにある。ここに自然保護派と開発派との間で壮絶な闘いが始まったのであった。カーソンは親友ドロシー・フリーマン宛の手紙の中で、「ダイナソア国立記念物公園にダムを造り、このすばらしい岩層や化石床を水没させるということは盲目的かつ意図的な破壊以外の何ものでもありません……無意味な破壊から手つかずの自然を守るというのが私にとってとても関心のある問題の一部なのです」(Freeman 16) と懸念を表明している。またこの手紙が書かれた1954年4月には、シータ・シグマファイにおいて次のような講演を行っている。

発電所建設といった商業的な計画によって、国立公園を侵害しようとする提案のなかに、私たちは国家的な規模の破壊的傾向を見出します。それらの公園は、すべての国民に開かれたものであって、私が指摘したところの娯乐的な、そして精神的な価値を彼らのために留めているのです。私たちの世代が、お金に目がくらみ、その利己的な物質主義のためにこれらのものの破壊を許してよいのでしょうか。美——そして、そこから導かれるすべての価値——は、ドルで評価することはできません。(ブルックス 319)

思い起こせば20世紀初頭、国立公園の父と称されたジョン・ミューアはヨセミテ国立公園内におけるダム建設問題に直面していた。そのときの言葉——「これらの寺院破壊者たち、破壊的な商業主義の信奉者たちは自然を完全に軽蔑し、山の神に目を向けるどころか万能のドルに目を向けているように思われる。ヘッチヘッチーにダムを造るとは！国民の大聖堂や教会を貯水タンクとして水没させるに等しい行為である。というのもいまだかつて神聖な寺院がこれほどまで冒瀆されたことはなかったからである」(Muir 817) が思い起こされる。

『失われた森』の中に収められた「自然を描く意図 (“A Design for Nature Writing”）」にはミューアの名前は見当たらないが、後述するようにミューアについても多少は読んでいたようだ。いずれにせよソロー以降の英米のネイチャーライティングの伝統がカーソンの思想の中核を貫いているといっても過言ではない。カーソンはネイチャーライティングの役割を次のように語っている。「私たちの身のまわりにありながら、ごくかぎられた人しか知らない驚異の世界に、多くの人々の注意を喚起することによって、よりよい文明に向わせる原動力となることができるのです」(142)。

「たえず変貌するわれらの海辺」

カーソンがアメリカの国立公園システムに対して高い評価を与えていたことは以上の例からもよくわかるが、一方カーソンの研究対象である海、特に海岸の保護に関しては、国立公園設置計画の中でも遅れていた。第二次大戦後、自然のままの海岸は急速にその姿を消しつつあり、開発の手が忍び寄っていた。国立公園システムの中に国立海岸 (National Seashore) があり、すでに戦前の1937年にはノース・カロライナ州ハッテラス岬が指定されていたが、その後全く公園造りは進捗していなかった。危機感をいだいた彼女は、1956年ニューヨーク動物協会の晩餐会で国立公園に多大な貢献をしたロックフェラー家のロレンス・ロックフェラーに会い、「いま最大の関心事は海岸を自然のまま保存することです」(リア 407) と語って援助を申し出ている。さらに1958年「たえず変貌するわれらの海辺」における「国民の海岸保護への訴えは、現代ネイチャーライティングの中でも最も雄弁に語られたものの一つである」(*Lost Woods* 113) とリアは述べている。カーソンは国立公園システムにおける海岸線保護の対策の遅れを次のように指摘している。

人間の力では、海を変えたり、汚したりすることはできないと思われるかもしれない。だが、そうではない。不幸なことに、私がここに記した海岸のいくつかは、もはや手つかずの自然ではない。それどころか、「開発」とやらしいものによって見るも無惨に汚され、娯楽場や飲食店、釣り小屋などが並び、ありとあらゆるがらくたが、「文明」の名のもとにまかり通っている。人間が持ちこむもろもろのものはあまりにもうるさくて、海の声は聞こえなくなってしまう。何処の海岸でも同じことが起きている。自然のままの海岸は、姿を消しつつある。(『失われた森』174)

カーソンと自然保護団体

カーソンはあまり社会的ではなく、控えめな女性というイメージが定着しているが、魚類野生生物局勤務のかたわら、オーデュボン協会の会員としてバードウォッチングを楽しんでいたことは、彼女の著作の中の「鷹の道」などというエッセイをとおしてよく知られている。役所を去ってからは自然保護団体との関係が密になり、その活動が生活の一部とさえなってきた。『沈黙の春』出版後、カーソンへの個人攻撃は激しくなるばかりであったが、唯一彼女を心から支え支援したのは自然保護団体であった。特にオーデュボン協会は『沈黙の春』執筆過程から協会の資料を提供し、出版後はその要旨を機関誌にさえ掲載するほど全面的にカーソンを擁護した。カーソンはオーデュボン協会のほかにもウィルダネス協会、ネイチャー・コンサーバンシー (自然保護委員会)、シエラ・クラブなどとの関係も深めていった。

カーソンがウィルダネス協会に入会したのは、ダイナソア国立記念物公園にダム建設

の計画が浮上した1950年ごろ（リア 180）であった。ウィルダネス協会は1935年環境倫理学の父と称されるアルド・レオポルドたちが立ち上げた自然保護団体で、ダイナソアではダム建設を中止に追い込み、後に自然保護運動の画期的な記念塔とも呼ばれる「原生自然法」(1964)を実現させるのに大きな役割を果たした団体である。この団体には魚類野生生物局の先輩たち、オウラス・ミュラーやホワード・ザニサーたちがいた。1945年ウィルダネス協会の事務局長に就任したザニサーは、カーソンの第一作『潮風の下で』の1章を機関誌『ネイチャー・マガジン』に掲載し、カーソンの才能を早くから見抜いていた。ただ残念なのは、自然保護運動の理論・実践の指導者であり、ネイチャーライティングの古典である『野生のうたが聞こえる』の著者レオポルドへの言及がないことである（Callicot and Back 114-15）。しかしながらレオポルドの「土地の倫理」とカーソンの「海の倫理」が『レイチェル・カーソン——遺産と挑戦』(*Rachel Carson: Legacy and Challenge*, 2008)で論じられる(94-117)に至って、今後両者の比較研究が期待される。

ネイチャー・コンサーバンシーは1951年に創設された自然保護団体で、生物多様性の観点から貴重な動植物の生息地を積極的に購入することで保護に貢献した。個人の活動では自然保護の限界を感じていた彼女は、1956年メイン州の支部長となると、後に「失われた森」と称される地区の保護に積極的にかかわった。多くの友人知人にまで自らの構想を語って、この地の保存を訴えている。このときの彼女の思いが親友ドロシーやボック夫妻に宛てた手紙の中に見出される。「この土地が永遠に今のまま美しくあってほしい！私が金銭を望むことがあるとしたら——それも大金を——それは、こういう場所に出会ったときです……もし、あの土地に野生生物保護区をつくることができたなら」(『失われた森』241)、「数年前に『われらをめぐる海』が出版され、生まれてはじめて、日々の生活に必要な以上のお金を手にしたとき、なにより強く感じたことは、そのいくぶんかを、ささやかながら、そうした自然保護のために使いたいということでした」(242)。

カーソンがウィルダネス協会を通してダイナソア国立記念物公園を守る運動に共感していたことはすでに述べたとおりだが、この闘争において中心的な役割を果たした自然保護団体はシエラ・クラブであった。シエラ・クラブは1892年に創設された由緒ある自然保護団体で、初代会長はジョン・ミューアである。20世紀初頭、ミューアの晩年に起きたヨセミテ国立公園内ヘッチヘッチーにおけるダム建設計画は、いわばダイナソアへの序章とも言える。自然保護運動が誕生して間もない時期、自然保護団体の力は開発派と比べて格段に弱く、結局ミューアはこの闘いに敗れ去った。しかしながらその後力をつけてきた自然保護団体は、「ヘッチヘッチーを忘れるな」をスローガンに徹底抗戦を貫き、ダイナソアにおけるダム計画を中止に追い込んだ。

当時のシエラ・クラブを率いていたのは常任理事のデイヴィッド・ブラウアーで、マスコミにも頻繁に取り上げられた伝説的な人物であって、カーソンも当然知っていたはずだが、著作には彼の名前もシエラ・クラブへの言及もドロシー宛の手紙を除き見出せない。二人の接点は『沈黙の春』出版後のことで、シエラ・クラブ理事会でヨセミテ国

立公園内における殺虫剤散布に反対したが、認められなかった経験をもつブラウアーは、『沈黙の春』が『ニューヨーカー』に掲載されたとき、それを読んで驚きの声をあげたのだった。

彼女は、生命の構造、私たちすべてが相互に関連しあっているという隠されたヴェールを取り払ってくれた。私は初めて生命を築き上げる本質的なものが私たちが毒で殺そうとしている下等動物にも人間と同じく存在することを理解し始めた。そんなにも単純な真実が、カーソンが訴えるまで多くの人々に欠如していたのは驚きそのものであった。(Brower 214)

その後二人はオーデュボン授賞式で出会い、1963年10月には、カーソンがカリフォルニアに講演旅行に来た際、ミューアの森国立記念物公園をブラウアー夫妻が案内している。この際カーソンは念願のレッドウッドの木を見て、感動したと言われている。カーソンとシエラ・クラブの直接の関係は彼女の晩年の数年間に限定されるが、シエラ・クラブを高く評価していたことは、遺産の一部がネイチャー・コンサーバンシーとともに寄贈されていることから理解できよう（リア 694）。

自らの自然保護の取り組み——アイランド・ビーチと失われた森

カーソン自身の自然保護活動は、1950年ニュージャージー州にある個人の私有地アイランド・ビーチを保存する地元の自然保護団体（アイランド・ビーチ・ナショナル・モニュメント委員会）を支援したときに始まる。アイランド・ビーチは大西洋岸中央部にあり、海岸線に平行して分布する長い砂州で、陸地との間にラグーンや沼沢地があるところで、アメリカでも数少ない重要な生態系が維持されていた。ここが売りにだされると、地元のアイランド・ビーチ・ナショナル・モニュメント委員会が保存に乗り出し、カーソンもそれに参加したのであった。もちろん彼女の役割は、文筆活動をとおしての自然保護の訴えであったが、具体的な場所を守るという活動は今までにないことであった。リアによれば、「アイランド・ビーチ保護運動の支援は、カーソンの自然保護への関心がはじめて実際の行動に現れたものだといえる」（273）。まもなく彼女自身のアイランド・ビーチを保護する時期が到来する。

メイン州サウスポートにあるカーソンの別荘近くには、海岸にそって森林地帯が続いている。彼女の描写によれば、「険しい断崖が迫るごつごつした海岸線、そして、ところどころ深く切れこんだ入り江では荒波がすばらしい光景を生みだし、またとない造化の妙を見せてくれます」（『失われた森』242）。カーソンと親友のドロシーはこの地を英国のナチュラリストH・M・トムリンソンにちなんで「失われた森」と呼んでいた。個人所有のこの森は売りに出されることが懸念されていたので、カーソンはなんとか購入し、保存しようと思っていたのだが、ネイチャー・コンサーバンシーの箇所述べたよ

うに、その金額は彼女の収入をはるかに超える高価なものであった。結局のところ、彼女の生前中、この地の購入はできなかったが、彼女の想いは死後ブースベイ・リージョナル・ランド・トラストが取得したことで実現し、現在では保護されるに至っている。

2. カーソンと緑の伝統——ネイチャーライティングの復活

カーソン自身多くの文学作品を読んできたが、とりわけ好んだジャンルはネイチャーライティングと称されるものであった。彼女が読んだ作家は、アメリカではオーデュボン、ソロー、メルヴィル、バロウズ、ベストン、英国ではトムリンソン、ウィリアムソン等が挙げられる。そのなかでも特にお気に入りの作家・作品として、英国ではウィリアムソンの『カワウソのタルカ』、『鮭のサラ』、アメリカではベストンの『ケープ・コッドの潮風』であった。『カワウソのタルカ』と『ケープ・コッドの潮風』の再刊の際には自ら書評をするほどのお気に入りの作品で、「私の好みに合っており、かつ私に強い影響を与えた本」(ブルックス 19)と語っている。『カワウソのタルカ』は野生生物の眼でものを見る大切さを教え、『ケープ・コッドの潮風』は海の魅力をいつも思い出させてくれるものであった。

カーソンは『われらをめぐる海』でジョン・バロウズ賞を受賞した。バロウズはソローの思想を継承するネイチャーライターであり、彼を記念してつくられた賞は、毎年すぐれたネイチャーライティングに与えられる。カーソンはその授賞式の席上「自然を描く意図」という講演を行った。この講演の中で、カーソンは英米にはソロー、バロウズ、ジェフリーズ、ハドソンなどのすぐれたネイチャーライティングの伝統が存在することを指摘し、一方で彼らの伝統に甘んじて単なる模倣者となることを戒め、「思想や知識の領域の開拓者」(『失われた森』138)たることを薦め、「彼らが時代の代弁者であったように、私たちもまたこの時代の代弁者として、新しいタイプの作品を創造するのです」(138)と聴衆に訴えかける。

この短い講演原稿には、後のカーソンの著書『沈黙の春』と『センス・オブ・ワンダー』を思い起こさせる箇所が随所に見出される。例えば、「人間は自らが創りだした人工的世界にあまりにも深く入りこんでしまいました。鉄とコンクリートの都市に暮して、大地と水があって種が育つという現実から、自分自身を切り離そうとしてきたのです。人間は自らの力に驕って自分自身や周囲の世界を破壊へと導く実験をいっそう進めようとしているように思われます」(138-39)は、人間の驕りと環境破壊を描いた『沈黙の春』を暗示し、「私たちをとりまく森羅万象の驚異や現実、しっかりと興味を集中できればできるほど、自らの破滅をもたらすような行いは少なくなるというのはもっともな考えだと思えますし、実際、私はそう信じています。驚き感動する心と謙虚さは有益であり、破壊を求める欲望とは共存しません」(139)は、『センス・オブ・ワンダー』の核心部分についている。実際のところ、この講演には wonder という語が4度使用さ

れている事実、特に最後にカーソンが「それ [ネイチャーライティング] は私たちの身のまわりでありながら、ごくかぎられた人しか知らない驚異の世界に、多くの人々の注意を喚起することによって、よりよい文明に向かわせる原動力となることができるのです」(142) と語る一節に、カーソンが現代社会にとってネイチャーライティングの必要性を明確に認識し、その復活を願っていた様子が窺い知れる。ガートナーはネイチャーライターの使命として、「普遍的な生への衝動や複雑な生態学的相互関係を強調しながら、驚異を目覚めさせ、理解ばかりか畏敬や愛情の必要性を認識しようと努める」(127) ことと定義している。この講演からちょうど10年後、カーソンの最大のネイチャーライティング、彼女の言うように時代にあった文学作品『沈黙の春』が出版されるが、その作品はネイチャーライティングの範疇をはるかに超えた、彼女自身の語る「時代の代弁者として、新しいタイプの作品」、いわば環境文学と称される分野の先駆けとなるものであった。

3. かけがえのない地球を守る——自然保護から環境保護へ

『沈黙の春』の構想は、人間が自然を完全に支配する力をもったときに、すでにカーソンの心の中で芽生えていたにちがいない。直接の契機は、『沈黙の春』の「まえがき」にあるように、1958年の1月ごろ、友人のオルガ・オーエンズ・ハキンズが殺虫剤散布による自然界の異変を警告したときに始まるが、翌月には親友のドロシー宛に手紙を書き、人間と自然との関係について深い考察をしている——「私の考えが変化しはじめたのは原子力科学が確立されてまもなくのようです……自然の多くは永久に、それを変えようとする人間の手には届かないものだ、と信じるのは快いことでした。人間は森を伐採し、川にダムを造るかもしれないけれども、雲や雨や風は、神が起こすものでした……人間という——生命の流れのなかの一滴にすぎないものに邪魔されることなく——生命の流れは、神が決めたほうへどんな方向へも時間とともに流れる。そしてどんなに物質的環境が生命を変化させても、生命が自然界を劇的に変化させたり——破壊したり——する力を持つことはあり得ない。そう考えるのは、なんと心地よいことでしょう」(リア 446)。

いまやこの信念が崩れ去ろうとしていた。特に広島、長崎に落とされた原子爆弾の脅威に、人間が創りだした文明の圧倒的な破壊力を看取したにちがいがなかった。最初カーソンは原子力の持つ放射能の危険性に関心をもっていたが、放射能と同様に危険な殺虫剤をはじめとする農薬という化学物質の潜在的な危険性を察知したと思われる。彼女は個々の地域の自然保護の必要性を認め、実際自らも自然保護行政に携わっていたこともあったが、第二次大戦後、大地の悲鳴にも近い声に耳を傾けた。それは農薬の乱用による大規模な生態系の破壊が進み、それが人間をも含む地球生命の存在を危うくしていることに衝撃を受けたのだった。

自然保護から環境保護へ

絶景の土地や野生生物を守るために、ウィルダネスを保存し、国立公園や国立野生生物保護区を拡充しようという、いわゆる自然保護運動に熱心であった自然保護団体は、身の回りの環境の異変に気づくのが遅すぎた。殺虫剤一つとっても、その移動は考えられないほど広範囲に広がる。従来のようなローカルで局所的な保護対策では太刀打ちできなくなってきたことに遅まきながら気づき始めたのであった。そのきっかけが『沈黙の春』という世界を変えた一冊の本であると言っても過言ではあるまい。いずれにせよ、『沈黙の春』出版以降自然保護団体は「環境」に目覚め、自然保護と環境保護の両方を政策の柱に据えた。本稿で言及する自然保護運動とは、ある特定の地域の自然を破壊から守り保護するという人間を中心とした考え方に対し、自然保護運動を広く地球という惑星まで広げ、グローバルな視点から自然や人間の住む生活環境までを破壊から守ろうとする運動を環境保護運動と定義する。この意味で、『沈黙の春』は自然保護運動の域をはるかに凌駕した環境保護運動上の原点となり、バイブルともなるものであった。

『沈黙の春』における環境思想

1962年6月12日、カーソンは以前から要請されていたスクリッps大学での講演を行い、その題を「人間と時の流れ」(“Of Man and the Stream of Time”)とした。『沈黙の春』の完成本はすでに批評家や議員に配布されており、6月16日からは『ニュー Yorker』でも掲載が始まることになっていた。単行本としてにホートンミフリン社から出版されるのは9月27日のことだが、この講演は『沈黙の春』の真髄を表明した、ある意味でカーソンの自然観・環境観の結晶とも言えるので、発表時期にかかわらず『沈黙の春』を先に論じた方がカーソンの真意に到達しやすいであろう。

『沈黙の春』は一般に農薬汚染、特に殺虫剤・除草剤などの化学物質による環境の汚染を世に警告したものと解されているが、そのような単純な表現で結論づけるにはあまりにも多くの問題を提起している。それは一言で言えば、われわれの20世紀型文明の本質の問題だと思われる。シュバイツァーやホワイトのエピグラフに典型的に見られるように、『沈黙の春』の主人公はDDTをはじめとする「殺虫剤」というよりも、むしろその殺虫剤を造り、使用した人間にある。『沈黙の春』をとおしてもっとも頻繁に使用された語は「人間」であることを思い出してほしい。『沈黙の春』は人間の生き方の問題、広い意味での科学技術文明のありようを世に問うた作品であると解釈できる。

『沈黙の春』のストーリーは、地球上のすべては生き物も含めて人間のために存在するという尊大かつ傲慢な人間中心主義的な生き方にメスが入られるという形式をとる。本書は科学書ではなく、哲学書である。多くの科学的事実が盛り込まれているのは紛れもないことだ。そのような科学の裏づけがあってこそ人間と自然との関係が科学的に証明される。しかしカーソンはそれだけで満足できなかった。単に殺虫剤の危険性を世に

知らしめることだけがカーソンの意図だとすれば、『沈黙の春』は浅薄で陳腐な作品になったであろうし、歴史を変える作品にはなりえなかったはずである。カーソンが訴えようとしたのは、殺虫剤をはじめとする人間が造り出した科学文明の発展過程を検証し、私たちが生きる文明が本当に正しいものであったかどうかを哲学的・倫理的観点から考察した、新しい生き方のヴィジョン、すなわち「べつの道」を示すことにあった。

第7章「何のための大破壊？」の冒頭の一節は、人間中心主義的文明に対するカーソンの怒りを垣間見ることができる。

自然を征服するのだ、としゃにむに進んできた私たち人間、進んできたあとをふりかえってえみれば、見るも無残な破壊のあとばかり。自分たちが住んでいるこの大地をこわしているだけではない。私たちの仲間——いっしょに暮しているほかの生命にも、破壊の鋒先を向けてきた。過去2、3百年の歴史は、暗黒の数章そのもの。合衆国西部の高原では野牛の殺戮、鳥を撃って市場に売り出す商売人が河口や海岸にすむ鳥を根絶に近いまで大虐殺し、オオシラサギをとりまくって羽をはぎとった、など。そしていままた、新しいやり口を考え出しては、大破壊、大虐殺の新しい章を歴史に書き加えてゆく。あたり一面殺虫剤をばらまいて鳥を殺す、哺乳類を殺す、魚を殺す。そして野生の生命という生命を殺している。(116)

また『沈黙の春』でもっとも物議を醸し出した第14章「4人にひとり」は、癌と化学物質の問題をとりあげた章であるが、ここでは癌を治す薬を見つけ出すよりも、癌にかからない環境の実現に取り組むようと、私たち人間の思考方法の転換を訴えている。「大部分の発癌物質は、人間が環境に作意的に入れてある。そして、その意志さえあれば、大部分の発癌物質をとりのぞくことができる。化学的発癌因子が私たちの世界に入ってくるのには、二つの道がある——一つは、皮肉なことに、みんながもっとよい、らかな生活を求めるため、もう一つは、私たちの経済の一部、ならびに生活様式がこのようなおそろしい化学薬品の製造や販売を要求するため」(310)とある。誤った文明の発展、コースをまちがえた20世紀文明のなれの果てが、カーソンにとって有害化学物質の氾濫という現実であった。その結果「4人にひとりがいずれ癌になる」(311)状況なのである。問題の本質を経済やライフスタイルにまで言及していることは、当時の世界観をはるかに凌駕する先駆的見識である。

また科学優越主義に対する疑念は、生態系全体を通眺する視点の欠如の批判につながる。例えば害虫は突然変異を通して殺虫剤への耐性を持つことを指摘した第15章「自然は逆襲する」、第16章「迫り来る雪崩」があり、いよいよ最後の局面である最終章で、殺虫剤に対するカーソンなりの解決策を提示する。その一つは雄の不妊化、しかしこれには生態系への悪影響も考えられるので慎重な取り扱いを促している。その他、誘引剤(液)、微生物、天敵などの駆除方法をオルタナティブとして提案する。

しかし繰り返し述べるように、『沈黙の春』は殺虫剤汚染を警告した書としてのみの

解釈を拒否する。殺虫剤を造り出した私たちが、20世紀文明の中でどのように生きるべきか、人間と自然との関係はどうあるべきかを根本的に自らに問い直そうとしているのである。『沈黙の春』の解釈は、最終章「べつの道」を読むと、おのずからカーソンのメッセージが披露されている。「私たちは、いまや分かれ道にいる。だが、ロバート・フロストの有名な詩とは違って、どちらの道を選ぶべきか、いまさら迷うまでもない。長いあいだ旅してきた道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行きつく先は、禍いであり破滅だ。もう一つの道は、あまり《人も行かない》が、この分かれ道を行くときこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守る、最後の、唯一のチャンスがあるといえよう」(354)。べつの道とはいかなる道か。それはちょうど本書の最後の1ページにまとめられている。

私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない——この考えから出発する新しい、夢豊かな、創造的な努力には《自分たちの扱っている相手は、生命あるものなのだ》という認識が終始光りかがやいている……

人におくれをとるものかと、やたらに、毒薬をふりまいたあげく、現代人は根源的なものに思いをひそめることができなくなってしまった……《高きに心を向けることなく自己満足におちいり》、巨大な自然の力にへりくだることなく、ただ自然をもてあそんでいる。

《自然の征服》——これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ。自然は、人間の生活に役立つために存在する、などと思いあがっていたのだ。応用昆虫学者のものの考え方ややり方を見ると、まるで科学の石器時代を思わせる。およそ学問とも呼べないような単純な科学の手中に最新の武器があるとは、何とそらおそろしい災難であろうか。おそろしい武器を考え出してはその銚先を昆虫に向けていたが、それは、ほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ。(381-82)

「私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない」——これに類する表現は『沈黙の春』に類出するが、カーソンの主義主張を一言で表せば、人間中心主義、人間優越主義を拒否し、地球に存在する他のものたちと共に生きる道を探求すべきであるということ、すなわちエピグラフに言及されたシュバイツァーやホワイトの言葉にあるように、私たち人間は地球で生きていくかぎり他者にも生きる権利を与えるほど謙虚さをもたねばならぬということである。カーソンに言わせれば、「自然の征服」などもってのほかで、「高きに心を向け」、「自然の力にへりくだり」、共に生きる道こそ「べつの道」、すなわち私たち人類に残された唯一の希望の道なのである。私たち人類はまだまだ成熟した種ではないとカーソンは主張する。実はこのようなカーソンの環境倫理的思想は1963年のCBSテレビのインタビューの中で、「私たちは自然の支配に熟達するのではなく、私たち自身を制御する面で熟達することを、今ほど強く求められたことはな

かった」(ブルックス 313) という表現に結実するが、この表現の起源を辿ると、『沈黙の春』出版直前に行われたスクリップス大学での講演のなかで明確に述べられていたのである。

「人間と時の流れ」——カーソン哲学の結晶

カーソンの伝記作家リンダ・リアはこの講演を「カーソンの自然に対する倫理的思考が円熟味を深めていることを、際立たせていた。レイチェルは自然作家から社会評論家、そして自然環境の擁護者へと大変身したことをはっきりと示した」(599) と述べて高く評価している。「人間と時の流れ」は『沈黙の春』出版とほぼ同時に行われた講演で、『沈黙の春』の内容と重なるところも多いが、実に多面的なカーソンの自然観、哲学、倫理観が披露されており、一般の作品であると思われる。残念ながら、ブルックスやリアの伝記ではその一部が紹介されただけで、まだ翻訳もされていないので、本稿ではできるだけ引用訳を挿入することで、この講演の真の姿を紹介したい。

この講演は大学生に向けられたこともあって、これからの地球の未来を決めるのは若い人々であることをかなり意識して熱く語られている。一読して、不幸にもカーソンの「悲劇的な自然観」が繰り返し語られるが、これは当時の冷戦時代の反映であることも影響していると思われる。カーソンは今日の問題の中でも最重要な問題として「人間と自然との関係 (man's relation to nature)」(5)、とりわけ「人間の自然に対する姿勢 (man's attitude toward nature)」(5) について話し始める。彼女の専門である海洋生物や文学について語ることは容易であっただろうが、彼女には最初から気になる状況があったのだ。それはおそらくは原子力という巨大な力を得た人間の進んでいる破壊的な方向である。彼女は次のように述べる。

人間は長い間、自然の征服 (the conquest of nature) について傲慢に語ってきました。今や人間は、自らの自尊心を満足させる能力を手にいれたのです。だがこの力は、知性に抑制されたものではなく、無責任がまかり通っています。人間は自然の一部 (man is part of nature) であり、征服の代償は人間自らの破壊であるということにはほとんど気づきませんでした。このようなことは大変不幸なことですし、私たちの究極の悲劇と言えるかもしれません。(5-6)

爆走する人間の力を止めるのは、これまた人間の力であり、それは人間の心以外にあり得ない。それを育み伸ばしてゆくのは、自然への愛や謙虚さを養うことである。この講演では言及されなかったが、例えば『センス・オブ・ワンダー』に見られる自然体験や彼女自身の生き方に反映された「生命への畏敬の念」が一つの希望となろう。

続いてカーソンがユダヤ・キリスト教の自然観に触れたのは注目に値する。「西洋では私たちの思考は、何世紀もの間、人間と自然との関係 (man's relation to nature) は、

ユダヤ・キリスト教的概念に支配されてきました。そこでは人間は、すべての地上の住民の主人とみなされています。したがって、地上のすべてのもの——生物であれ無生物であれ、動物、植物、鉱物——そして地球そのものも——人間のために造られたという考えが容易に生まれてきたのです」(6)。リン・ホワイトは有名な論文「現在の生態学的危機の歴史的根源」(1967年)の中で「キリスト教……もっとも人間中心主義的な宗教である……人と自然の二元論をうちたてただけでなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのである」(87-88)と語ったが、その論文に先行すること5年、いかにカーソンが先駆的な自然観をもっていたかがよくわかる。

ユダヤ・キリスト教的自然観に対抗するものとしてカーソンが取り上げたのが、ジョン・ミューアの思想である。他の著作、特に「自然を描く意図」ですらその名前をあげなかったミューアは、彼女の慕うソロー以降のネイチャーライティングの伝統を継承する重要な作家と位置づけられている。カリフォルニアでの講演とあって、地元で著名なネイチャーライターであり、自然保護活動家、国立公園の父と称されるミューアを取り上げることで、学生たちの関心を喚起したかったのであろう。カリフォルニアの山に精通し、愛したジョン・ミューアは、ユダヤ・キリスト教的自然観を痛烈な皮肉で語っている。「すべて神が創った世界において、生きていようが死んでいようが、自分たちの食物にならないとわかると、多くの人々は驚きあきれてしまう」(7)。カーソンも同じような経験を語っている。「たまたま出会った知人に潮溜まりの繊細な生物を指摘すると、彼は「それは何かの役に立つのですか」ときくのです。それが食べられるか、少なくとも装飾品となって店の商品とならないことがわかると明らかに失望するのです」(7)。カーソンはミューアが人間中心主義とは無縁の生命中心主義を唱えていたと強調するが、この彼女の主張は環境倫理学者ナッシュの名著『自然の権利』の中(116-21)でも是認されている。

講演はいよいよ佳境へとはいり、『沈黙の春』の真髓がいたるところで反響してくる。と同時に彼女の失望も明らかにされる。

今私は人間の使用と便利のために造られた世界という誤った概念を深く考えているところです。しかし私がこのように思うのは、このような考え方——昔の時代の遺産——がもっとも重要な問題の原点であると確信しているからなのです。昆虫の世界であれ宇宙の神秘的な世界であれ、私たちは依然として「征服」という言葉で語っています。私たちはまだ自分自身を、信じられないほど広大な宇宙の、神秘的ですばらしく統一の取れた宇宙のごく小さな一部分であるとみなすほどには成熟していないのです。(8)

今日人間の自然に対する姿勢は、その自然を破壊する力ゆえに極めて重要です。長年国際自然保護同盟として知られているすばらしい組織がありました。広島への原爆投下以前、私は自然——広い意味での自然——が実際に人間から保護される必

要があるのかどうか考えたことがありました。確かに自然は不可侵で永遠なもので、それを変えるほどの力は人間にはなかったのです。

確かに水が雲に吸い上げられ、再び大地に戻ってくる巨大なサイクルは、人間の手に決して触れられるものではありませんでした。ちょうど生命の大きな流れ——渡り鳥もその一例です——は大陸を越えて往来し、季節の推移を特徴付けるものでした。しかし私は間違っていました。永遠の真実と思われていたこうしたものですら、脅威を受けているばかりか、すでに人間の破壊の手がのびているのです。(8)

講演の中でももっとも悲劇的な認識は、「私は間違っていた (I was wrong.)」という一文に要約されよう。激しい自責の念にかられて発した「私は間違っていた」は、自らの甘い自然観の修正を余儀なくさせるものであった。彼女はネイチャーライターからエンバイロメンタリストへと変身してゆく。その過程は次々と明らかにされる化学物質の脅威を描いた『沈黙の春』を熟読すればおのずと理解できるであろう。

では人間による破壊をくいとめる方法はあるのだろうか。カーソンは作家として、エコロジストとして聴衆に訴えかけるが、その際強力な支えとなる人物は、彼女がもっとも信頼していたと言われているアルベルト・シュバイツァーであり、彼の「生命への畏敬の念」の哲学である。

今や私たちは他の生物に戦争をしかけ、現代化学という恐るべき武器で装備して、まるですべての種を絶滅の縁に追いやる権利を擁しているかのようです。このような考えは、あの平和的なアルベルト・シュバイツァー——生命への畏敬の念の哲学——とは全く相反するものです。全世界の人々はシュバイツァー博士を尊敬していますが、彼の話を理解しているようには思われません。(9)

シュバイツァーについては著作の随所で引用しているように、カーソンの人生哲学の根幹であると言っても過言ではあるまい。カーソンがいつからシュバイツァーに関心を持っていたのかはリアの伝記からははっきりしないが、彼の思想を身をもって教えたのはほかならぬ母親のマリアであった。1958年、母親が亡くなった後、彼女は友人に宛てた手紙の中で次のように語っている。「母が生命やすべての生き物を愛した気持ちはだれでもが認めるすばらしい人徳です。私の知るかぎり、母ほどアルバート・シュバイツァーのいう「生命への畏敬」を、身をもって体現しているひとはほかにはいません」(リア 484)。シュバイツァーが核実験反対の声明を發し、1949年にアメリカに來たこと (Free 8) で、より身近に感じられたのかもしれない。彼女はシュバイツァーの哲学に共鳴し、『沈黙の春』のエピグラフに彼の言葉を掲げたことはあまりにも有名なことである。

「生命への畏敬の念」は自然・環境保護運動ばかりか動物愛護運動にも生かされている。そもそもシュバイツァー賞を授与する組織は動物愛護協会 (Animal Welfare Institute)

であり、受賞以前から動物愛護協会の教育用ブックレット『生物学を理解するために』（1960年）を書き、その中で「子供時代にあらゆる生物には命があると認識し、命への畏敬の念を育ててこそ、はじめて人類に対する豊かな愛を持つことができるのだ」（『失われた森』268）と述べたばかりか、ルース・ハリソンの『アニマル・マシーン』（1964年）の序文（1964年）では「シュヴァイツァー博士のように、あらゆる生物に対して道徳に適った思いやり——生物への畏敬の念」——を抱かないかぎり、人間どうしの平和は訪れない、私はそう確信している」（271）と語る。リアによれば、「この動物愛護という二つの序文には、カーソンの生命への畏敬についての思慮深い哲学が反映されている。動物を思いやりを持ってとり扱うことは、カーソンの関心事であり、熱心に支持した主張だった」（531）。シュバイツァー・メダルの受賞スピーチにおいても、「私たちを取り巻く問題の幾つかにたどりつきたければ、主にシュバイツァーの理念をより広く理解し適用することを通してであることは確実です」（Free 13）と語っている。現在ではシュバイツァーはほとんど読まれなくなり、もはや過去の人となった感もあるが、私たちは今度カーソンを通して生命への畏敬の念を学ばなくてはならない。

講演「人間と時の流れ」の後半は「時間」についての考察からなる。

この問題（訳者注：自然に対する戦争は必然的に自分自身に対する戦争で、無分別な破壊行為は地球の巨大な循環の中に入り込んで、やがては人間に戻ってくる）には永遠のテーマが流れています。そのテーマとは、人間の落ち着きのない熱病的なペースを気にすることなく、ゆったりと流れる時間のことです。それは地質学的要因から成り立ち、山を造っては削り取り、海底から海を上昇させては大陸を水浸しにした後、水は引いてゆきました。しかしもっと重要なのは、生物学的出来事から成り立つということです。つまり生きた原形質が外的世界の状況に適応できるかがもっとも肝要なのです。今の私たちがあるのも、数百万年、数億年の歳月をかけて適応をかちえたからなのです。生物に有害な環境の要素はいつも存在していました——極端な気候変動、岩や大気に含まれる放射線、陸地や海における毒素の存在です。しかし長い時間をかけて生命は順応、すなわち均衡に達したのです。

今や私たちは人工的な環境——かなりの程度まで「人間が造った」ものから成り立つ環境——を造り出すことで、この均衡を壊しつつあります。もし私たちが生き残ることができるのであれば、適応しなければなりません。放射線はもはや岩や日光の自然放射線だけではなく、原子をいじくりまわした結果生じています。同じように、全く新しい化学物質が実験室から登場していますが、その量は驚きです。しかもこれらがすべて急速に環境に導入されているのです。生物がそれらに適応する時間は全くない有様です。

1955年70人の科学者がプリンストン大学に集まり、地球の様相を変える人間の役割について考えました。約1200ページにおよぶ報告書は、人間の火の使用からスプロール現象〔都市化の拡大〕まですべての変化を扱ったものですが、それはものす

ごい記録です。もちろんすべての変化が望ましくなかったというわけではありませんが、人間活動の顕著な特徴は、短期間に利益を得るという近視眼的な視点からなされ、地球にどのような影響が及ぶか、また自らにどのような長期的影響があるかを考慮してこなかったことです。(9-10)

カーソンはこのような現状の下で、頼るべき科学者は生物学、エコロジー、遺伝学に関わる人々であると示唆する。

人間活動の特徴は、奇妙にもある分野で利用できる知識で導かれていない点にありました。つまり、とりわけ生物学者、エコロジスト、遺伝学者の知識です。彼らはみな人間活動が生物、もちろん人間をも含めての生物に与える影響を予想することができる特別な能力をもった方々なのです。(10)

講演の最後で再度若き学生たちに向かって彼女の最後のメッセージを託す。

自然に私たちの意志を押し付けるのではなく、自然が語ろうとしていることに時々耳を澄まして聴くべきです。もしそうすれば、この私たち自身の病的な生活に新しい視点をもたらしてくれるでしょう。もしそうしなければ、人類の半数が他の半数を破壊しようとたくらみ、地球全体を放射能の灰に還元してしまう愚かで狂気の世界を見ることになるかもしれません。〈中略〉

私は私たち自身の世代が人間と自然との関係を深く考察し、私たちのすむ地球の荘厳さと美と同時に恐怖をも見抜く知性と謙虚さを学んでほしいと思っています。残念なことに、こんなことは言いたくはないのですが、恐るべき破壊力を持つに至ったのは私たち人間なのです。

しかし時の流れは進み、人類も時間と共に進んでいます。あなたたちの世代はきっと環境と折り合いをつけられるようになるはずです。無知や真実を避けることから逃げないで、現実を直視してください。あなたたちには重大かつ荘厳な責任がありますが、それはすばらしい機会でもあります。あなたたちは人類が今まで問われたことがないような世界の中で生きるのです。そこで自然を征服するのに長けるのではなく、人間自身の成熟さと熟達さを証明してください。そこにこそ私たちの希望と運命があります。「今日のうちにすでに明日が歩み始めているのです。」(10-11)

4. 『沈黙の春』を越えて——「環境の汚染」

カーソンの最後の講演は、亡くなる半年前の1963年10月、サンフランシスコにあるカイザー財団病院グループが主催する年次シンポジウムの基調講演として行われた。体調

の悪いなか西海岸まで出かけて行ったのは、大きな影響力をもつ聴衆に話す絶好の機会だと彼女が思ったからである。結局これが最後の講演となったが、カーソンが一生かけて探究してきた人間と自然との関係、特に人間の近視眼的な行為の結果が環境に大きな影響を与えるという『沈黙の春』の精神が繰り返し語られる。その中でも最大のテーマは皮肉にも農薬ではなく放射能であった。遺言とも言うべきカーソンのこの講演が、2011年3月11日以降の日本の現状を抉り出している。私たちは思わぬところでカーソンの最後のメッセージに再び真摯に立ち向わなければならなくなった。

リアによれば、カーソンは公の場で初めて「エコロジスト」と称した(『失われた森』312)とされるが、彼女がエコロジーの特徴である物と物との関連性や相互作用、全体とのつながりに早くから着目していたことは明白である。第一作『潮風の下で』以降、いやその前の新聞や雑誌に掲載した小作品の中にすでにエコロジストとしての思想は垣間見られた。エコロジストゆえにカーソンは環境の汚染により敏感に反応したのである。

私は現代が抱える汚染の問題を、エコロジストの視点から検討したいと願っています……問題を全体的に見ることもまた必要なのです。ある汚染物質を環境中へ持ちこんだ、直接的な原因の向こうにあるものを見つめ、できごとの連鎖をたどっていくことが必要なのです。全体のつながりをけっして忘れてはなりません。生物だけを考えることはできません。自然環境だけを独立した存在として考えることもできません。両者は互いに作用しあって、生態学的な複合体、すなわち生態系を形づくっているのです。(317)

この講演内容は、前年度スクリップス大学で行われた講演「人間と時の流れ」をさらに濃密に拡大させたもののように思われる。それは聴衆が医学の専門家ということもあろうが、カーソン自身おそらく最後の講演となることを予期していたのではなかろうか。彼女はそのとき持ち合わせていた全能力を発揮する。彼女は生態学者として著名なバリー・コモナーを引用し、「新しい科学技術が実際に使用される前に、それに伴う危険性について評価されることはめったにないと指摘し」(318-19)、「私たちはそれが巨大な経済的・政治的な構造の一部に埋めこまれて、変更が不可能になってしまうまでそのまま放置しているのである」(319)と断定する。本当に先駆的かつ的を射た洞察である。さらに現代の諸問題を三つ上げて、第一に人口増加の問題、必然的に多種多量な環境汚染物質が増加すること、第二に、現在の環境汚染物質の危険性、および体内に容易に取り込まれること、第三に、環境汚染物質の投棄、その流動性(319-20)を指摘する。そして今まで扱った合成農薬から話題を放射線に移す。

「環境の汚染」という講演の特徴は、確かに『沈黙の春』でも何箇所かで言及されていたものの、『沈黙の春』の究極のテーマはあくまでも殺虫剤をはじめとする農薬の生態系への汚染が中心であった。ところがこの講演では農薬を超えて放射能汚染の危険性が詳しく語られていることである。元来カーソンは放射能に関心があり、このテーマで

書くことを望んでいたが、喫緊の殺虫剤や除草剤の危険性が身に迫るにつれて、放射能の問題は後回しせざるをえなかった。おそらく長生きしていれば、私たちに多くの啓示を与えてくれたはずの著書が書かれたにちがいがなかった。もともと原子力時代に生きたカーソンにとって、広島・長崎への原爆投下に始まり、地上・地下核実験、平和的な核の利用から核廃棄物処分の問題まで疑念に満ちた状況であったはずだ。特に彼女が懸念したのは、自らの専門領域である海が、核廃棄物の汚染で本来の機能を失うのではないかということであった。

驚くべきことは、カーソンが繰り返し「セシウム137」、「ストロンチウム90」、「放射性ヨウ素」などの放射線物質に混じって「ホット・スポット」(328)にまで言及していることである。まさに2011年3月11日以降の忌まわしい日本の現状と重なってくる。私たちは地球温暖化ばかりに目を奪われ、放射能の危険性を忘れていた。確かにスリーマイル島の事故、チェルノブイリの事故などの先例はあったが、外国のことにはあまり関心がなかったこともある。今「環境の汚染」という講演原稿を読むと、私たちは高木仁三郎たちの意見にも耳をかさず、ましてや『沈黙の春』の警告をも無視して、物質文明を謳歌し続けていたのだった。そのつけを払うのに、私たちの未来世代までを拘束することになるとはだれも予想しなかったであろう。カーソン曰く「私たちが住む世界に汚染を持ちこむというこうした問題の根底には道義的責任——自分たちの世代ばかりでなく、未来の世代に対しても責任をもつこと——についての問いがあります」(332)。カーソンの最後のメッセージは、現代文明を問い直し、未来世代のためにも地球と共に生きる「べつの道」を模索するようという彼女の遺言として響いてくる。

参考文献

- Brower, David. *For Earth Sake: The Life and Times of David Brower*. Salt Lake City: Gibbs and Smith Publishers, 1990.
- Callicot, J.Baird and Elyssa Back. "The Conceptual Foundation of Rachel Carson's Sea Ethic." *Rachel Carson: Legacy and Challenge*. Ed. Lisa H. Sideris & Kathleen Dean Moore. 114-15.
- Carson, Rachel. *Lost Woods: The Discovered Writing of Rachel Carson*. Ed. Linda Lear. Boston: Beacon Press, 1998.
- . "Of Man and the Stream of Time." Claremont, CA: *Scripps College Bulletin* Volume XXXVI No. 4 (1962): 5-11.
- Free, Ann Cottrell. *Since Silent Spring: Our Debt to Albert Schweitzer and Rachel Carson*. Washington, DC: The Flying Fox Press, 1992.
- Freeman, Martha, ed. *Always, Rachel: The Letters of Rachel Carson and Dorothy Freeman 1952-1964*. Boston: Beacon Press, 1995.
- Gartner, Carol B. *Rachel Carson*. New York: Frederick Ungar Publishing, 1983.
- Muir, John. *John Muir: Nature Writings*. Ed. William Cronon. New York: The Library of America, 1997.

Sideris, Lisa H. & Kathleen Dean Moore, eds. *Rachel Carson: Legacy and Challenge*. Albany: State University of New York Press, 2008.

カーソン、レイチェル. 『失われた森——レイチェル・カーソン遺稿集』古草秀子訳、集英社文庫、2009.

——. 『沈黙の春』青樹築一訳、新潮文庫、2007.

ナッシュ、ロデリック・F. 『自然の権利』松野弘訳、ちくま学芸文庫、1999.

ブルックス、ポール. 『レイチェル・カーソン』上遠恵子訳、新潮社、1992.

ホワイト、リン. 『機械と神』青木靖三訳、みすず書房、1999.

リア、リンダ. 『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』上遠恵子訳、東京書籍、2002.

*本稿は科学研究費（題目「アメリカ文学と自然・環境保護運動」）の研究成果の一部である。